

毎日ヘルス&ライフ

私のQOL 内科医・岩尾聡士さん

毎日新聞 2017年7月28日 東京朝刊



岩尾聡士さん（左）と公私共にパートナーの妻康子さん＝名古屋市の「まごころの杜クリニック」で

<Quality Of Life>

医療と看護、介護のある街づくりを 住宅型ケア施設「まごころの杜」開設

名古屋市の「高齢社会街づくり研究所」の代表で内科医の岩尾聡士さん（55）は超高齢化社会に突入した日本に「医療と看護、介護が連携したシステムを」と行動する。「IWA Oモデル」と名付けたプログラムを推進し「お年寄りや子ども、障害者などみんなが安心して希望を持って暮らせる街づくりを目指したい」とフアイトにあふれる。【明珍美紀】

「医師としてはアウトロー的な存在」と語る。名古屋大学医学部在学中の28歳からボクシングを始め、30代前半で全日本社会人選手権3位になった。「研修医時代も（同大医学部の）医局に属さなかったが、スポーツを通して

人間の健康や老化、運動や食について深く興味を抱くようになった」という。

医療と街づくりが結びついたのは米国留学がきっかけだった。米国立老化研究所（メリーランド州）に所属しながら各地を視察し、同州ボルティモアにあるジョンズ・ホプキンス大学医学部の附属病院が主導する「エルダーハウスコール」と出合った。「医師や看護師らが地域を訪問し、約2000人の高齢者を見守る体制を整えていた」

帰国後、臨床の現場に戻り、加速する高齢化に「このままでは日本の医療、介護は崩壊する」と危機感が募った。母校の名古屋大学発のベンチャー企業として高齢社会街づくり研究所を設立し、独自の「CBMCヘルスケアイノベーションIWA Oモデル」の事業に着手。具体的には、病院に代わる入居型医療施設を地域に広げていくことで、地元企業や医療法人の協力を得て名古屋市の昨秋、開設した「まごころの杜（もり）」はその先駆けとなる住宅型の緩和ケア施設だ。がんや難病などを患った人々が対象となり、入居者は個室で暮らす

介護士や看護師が24時間体制でケアに当たる。併設のクリニックには医師が常駐し、院長は妻で外科医の康子さん（48）が務める。

「私自身の今の役目は医療、看護をベースにした生活コンシェルジュ。将来的には子どもたちの未来を開くような教育に携わりたい」と話す。人が喜ぶ姿を見るとうれしくなる。「それが子どもだと、みなさんも、より幸せな気分になりますよね」

■人物略歴

いわお・さとし

福岡市生まれ。名古屋大医学部卒。愛知県大府市の国立長寿医療研究センター勤務を経て1997～2001年、米国に留学。11年に「高齢社会街づくり研究所」を設立。今年3月まで名古屋大大学院特任教授、藤田保健衛生大学長寿包括ケアクリニック所長を務めた。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.